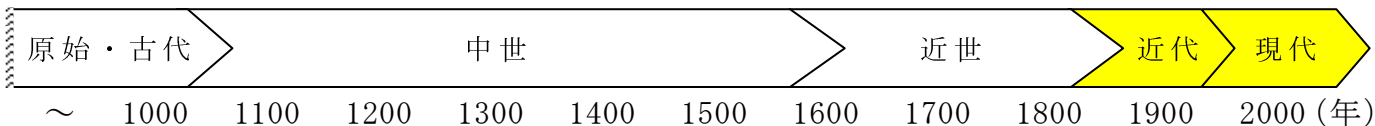


5 第二次世界大戦とひろしま ～原爆ドーム～



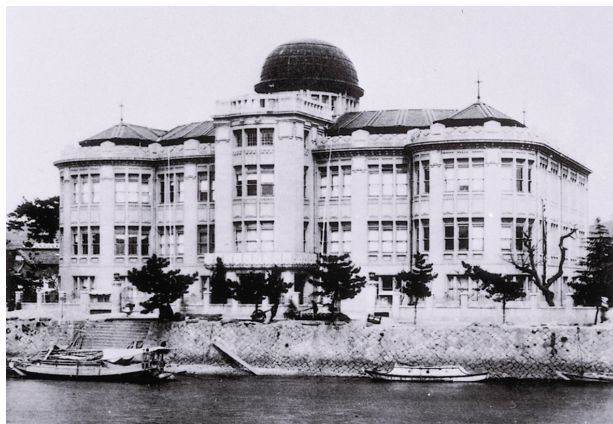
1 原爆ドームとはどのような建物なのでしょうか？

下の2枚の写真は同じ建物の写真です。左の写真は、広島市中区にある原爆ドームで、右側は被爆前の写真です。この建物は、1915（大正4）年、広島県物産陳列館^{ちんれつ}として、チェコ人ヤン・レツルの設計により建てられました。当時の広島では、このようなヨーロッパ風の建築デザインによる建物は非常に珍しく、広島の名所の一つとなっていました。1933（昭和8）年には広島県産業奨励館^{しょうり}という名称に変わり、ここでは、物産品の展示・販売以外にも博物館や美術館として利用されるなど、広島^{しんこう}の文化振興の拠点となっていました。しかし、戦争の激化につれて、館内の展示や運営が縮小され、官公庁等の事務所として使用されるようになりました。

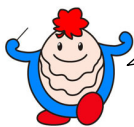
1945（昭和20）年8月6日午前8時15分、この建物の南東約160メートルの地点に原子爆弾が投下されました。爆風がほとんど真上から到達したために、建物の一部は倒壊を免れ、残った頂上部分の形から「原爆ドーム」と呼ばれるようになりました。



原爆ドーム



広島県産業奨励館（広島平和記念資料館提供）



第二次世界大戦によって、広島の人々のくらしは、どのように変化したのでしょうか？また、「原爆ドーム」はなぜ世界遺産になったのでしょうか？

2 広島の人々は原爆投下前、どのような生活をしていたのでしょうか？

明治になり、広島に陸軍の拠点として鎮台^{ちんだい}⁽¹⁾が設置されて以降、軍都として発展した広島では、軍関連の施設が多く作られ、造船や金属工業など軍需産業^{ぐんじゆ}が盛んになりました。第一次世界大戦を契機



戦前の広島市街（提供：堤憲明）

に、国内の産業は発展し、広島のみちも活気付きました。それまでにあった、工場や住宅、商店に加え、活動写真常設館（今の映画館）や喫茶店などを備えた商店街もできました。市内電車の交通網も整備されました。

1931（昭和6）年に満州事変^{まんしゅうじへん}が起こると、広島からも宇品港などから派遣部隊が大陸へ渡りました。1937（昭和12）年に日中戦争が始まると、広島の各工場では軍需物資の生産が盛んに行われるようになりました。その反面、原材料も労働力も軍需生産に集中されたため、食料や衣料などの生活必需品が次第に不足し、物価も上昇してきました。

この物資の不足により、1937年（昭和12）年から肥料・石油などで配給制^{ひりょう}が実施され、1940年（昭和15）年からは、米や麦などの生活必需品にも拡大されました。戦争の情勢が悪化してくると、生活必需品の不足はいつそういちじるしくなり、苦しい生活がしいられました。



幟町国民学校での畑づくり作業（提供：山之上弘子）

やがて、国内の各都市への空襲が激しくなり、1945（昭和20）年4月には、空襲を逃れるため、広島市でも学童疎開^{がくどうそかい}が始まりましたが、広島はほとんど空襲を受けることはありませんでした。しかし、8月6日、原子爆弾が投下され、熱線と爆風により、広島市は火の海と化したのです。

3 原爆は広島にどのような被害をもたらしたのでしょうか？

原爆の投下により、爆心地から1.2キロメートル圏内^{けんない}のほぼ半数の人々が、その日のうちに死亡し、2キロ圏内の建物はほとんどすべて破壊^{はかい}されました。全壊・全焼した建物の数は、5万以上ともいわれています。また、原爆投下後には「黒い雨」が降り、放射能による被害地域を拡大しました。

原爆被害により、広島では、1945（昭和20）年中に約14万人が死亡したと推定されています。



原爆投下後の広島市街地
（撮影：岸田貢宜 提供：岸田哲平）

4 広島のみちはどのように復興し、どのような都市づくりが目指されていたのでしょうか？

広島は、被爆によって市街地^{しがいち}が失われ、復興の中心となるべき任務^{にんむ}をもつ市役所も多くの死傷者を出し、庁舎も全焼していました。しかし、こうした中において、広島の人々は新しい生活をつくるため予想以上に速く立ち上がりました。原爆投下から3日後には、市内電車が動き始め、水道や電気なども次第に

復旧し、人々も戻ってきました。これは、広島の人々の復興への努力はもちろんですが、軍都であったために、防衛体制を整えており、周辺町村を中心に全県下に非常時の救援体制が整えられていたという面もあったようです。こうして被爆直後に約8万3000人だった人口は、一年後には約18万8000人にまで回復します。しかし、人々が



相生橋復旧作業
(広島平和記念資料館提供)

住んでいたのはバラックや被爆した建物を修理しただけのものであり、これらを放置すれば無秩序な街並みができることは明らかであり、新しい都市計画が必要でした。

1945(昭和20)年11月には、第二次世界大戦で被害を受けた全国の都市の復興のため、国は戦災復興院をつくり、広島市を含む全国115の都市を戦災復興都市に指定しました。これを受け、それぞれの都市で復興の都市づくりが行われることになりました。

こうして、復興は始まりましたが、人口の減少などにより税金が集まらなかったことなどから、財源が不足し、計画通りにはなかなか進みませんでした。そこで、国に対し復興資金の追加や、国の持っている土地を無償で譲ってもらえるようお願いをしましたが、115の戦災復興都市の中で、広島市だけに特別な援助をするわけにはいかないということで、要望は聞いてもらえませんでした。そこで考え出されたのが、憲法95条による特別法⁽²⁾の制定でした。

1949(昭和24)年5月、多くの関係者の努力によって、広島だけに効果のある「広島平和記念都市建設法」が国会で可決されました。しかし、この法律の成立には、広島市民の同意が必要とされることから、同じ年の7月7日に日本で初めての住民投票が行われました。広島市では圧倒的な賛成による法律の成立を目指して、投票と協力を呼びかける大規模なPR運動を行いました。その結果、圧倒的多数の賛成を得て、日本で初めての憲法95条による特別法が成立

「広島平和記念都市建設法」(一部抜粋)

(目的)

第一条 この法律は、恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として、広島市を平和記念都市として建設することを目的とする。

(計画及び事業)

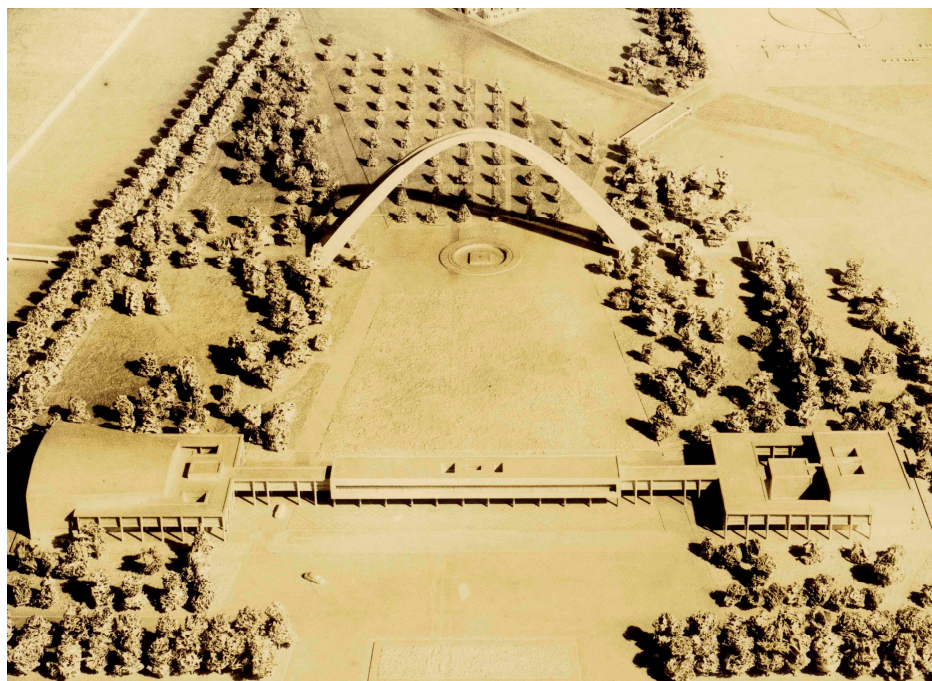
第二条 広島平和記念都市を建設する特別都市計画(以下平和記念都市建設計画という。)は、都市計画法(昭和四十三年法律第百号)第四条第一項に定める都市計画の外、恒久の平和を記念すべき施設その他平和記念都市としてふさわしい文化的施設の計画を含むものとする。

2 広島平和記念都市を建設する特別都市計画事業(以下平和記念都市建設事業という。)は、平和記念都市建設計画を実施するものとする。

することになったのです。「広島平和記念都市建設法」は、原爆投下のちょうど4年後の1949（昭和24）年8月6日に公布、施行^{しこう}されました。この法律ができたことにより、国をあげて、広島市を世界平和のシンボルとして建設することになりました。この法律は、広島市の都市づくりの方向性の決定、国からの援助の増大など、広島の復興や都市づくりに大きな役割を果たしました。

この法律の考え方にに基づき、新たに「広島平和記念都市建設計画」がつけられました。「平和記念都市」の建設に当たっては、恒久平和を記念する施設を備えていることや平和記念都市としてふさわしい文化的施設を備えていることが求められました。現在の中島町には、平和記念資料館・慰霊碑や大集会場

などを備えた平和記念公園が設けられることになり、そのデザインは設計コンペティション（競争）で決められました。1949（昭和24）年に設計公募が開始され、145点の応募作品の中から大アーチを通して原爆ドームを見通す^{たんげけんぞう}丹下健三（【もっと知りたい！郷土の歴史】参照）のチームのデザインが一等となり、現在の平和公園の原型となっています。



平和公園設計時の模型（丹下健三設計）
（広島市公文書館提供）

5 原爆ドームは、なぜ世界文化遺産になったのでしょうか？

原爆ドームについては、保存の考えに賛成する人たちばかりではありませんでした。平和の象徴としてそのまま残すべきであるという意見が多かった一方で、それを見るたびに、過去の恐ろしく悲惨な光景や思い出をよみがえらせてしまうので、取り壊すべきであるという意見もあり、保存と取り壊しの方針が決まらないまま、長い間そのままの状態となっていました。昭和30年代に入ると、原爆ドームの老朽化^{ろうきゅう}などが原因で倒壊の危険性が増し、「保存か」「取り壊しか」という議論が始まりました。

その後、保存を求める声が高まり、広島市では1966（昭和41）年、広島市議会が原爆ドームの保存を要望する決議を行いました。保存のための費用は、全国からの募金^{ぼきん}によってまかなわれました。

1992（平成4）年、日本の世界遺産条約加盟を受け、原爆ドームを世界遺産に登録しようという声があがってきました。当初、国は世界遺産にすることに

ついて、否定的な見解を示していましたが、原爆ドームの世界遺産化を求める全国的な署名運動が展開された結果、当時の文部省（現在の文部科学省）は、1995（平成7）年に世界遺産として登録することの推薦を行いました。1996（平成8）年にはメキシコで開催された世界遺産委員会において、人類史上初めて使用された核兵器の惨禍をありのままに伝えるとともに、時代を越えて核兵器廃絶と世界平和を訴えるメッセージを世界中に発信し続ける文化遺産として、原爆ドームの世界遺産登録が決定しました。



第二次世界大戦前から復興までの広島の様子及び原爆ドームが世界遺産となるまでの経緯について、調べたことや考えたことをもとに自分の言葉でまとめてみましょう！

【注】

- (1) 明治時代前半に置かれた日本陸軍の編成単位のこと。1873（明治6）年には、東京、仙台、名古屋、大阪、広島、熊本に置かれた。
- (2) 一つの地方公共団体だけに適用される特別な法律のこと。この法律を制定するためには、適用されることとなる地方公共団体の住民投票で、過半数の同意を得る必要がある。

【もっと調べてみよう！郷土の歴史】

- 身近な地域の戦争や被爆の様子について調べてみよう！
 - ・戦時中の衣・食・住はどうだったのでしょうか。
 - ・学童疎開や建物疎開はどのようなものだったのでしょうか。
 - ・原爆の影響はどのようなものだったのでしょうか。
 - ・「黒い雨」とはどのような雨で、どの地域まで降ったのでしょうか。
- 原爆以外に、県内で受けた空襲などについて調べてみよう！
 - ・呉空襲や福山空襲では、空襲の様子はどうだったのでしょうか。その前後のまちや人々のくらしの様子はどのようなものだったのでしょうか。
- 原爆ドーム以外の被爆建物について調べてみよう！
- 身近な地域の復興の様子について調べてみよう！
 - ・身近な地域の人々は戦後の復興にどのようにかかわっていったのでしょうか。

◇広島平和記念資料館

住所 広島市中区中島町 1-2 TEL：082-241-4004（総合受付） HP

◇国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

住所 広島市中区中島町 1-6 TEL：082-543-6271 HP

※原爆被災に関する多くの資料が展示されています。

◇広島市役所

住所 広島市中区国泰寺町一丁目 6-34 TEL：082-245-2111 HP

◇広島市公文書館

住所 広島市中区大手町四丁目 1-1 TEL：082-243-2583 HP

【もっと知りたい！郷土の歴史】

竹屋国民学校六年生の日記～空腹をこらえて慣れない暮らし～

戦時中の人々の生活については、さまざまな記録が残されています。1945（昭和20）年当時、広島市の竹屋国民学校（現在の広島市立竹屋小学校）六年生であった学童の日記が残っており、集団疎開先である筒賀村（現在の安芸太田町筒賀）での暮らしぶりがつづられています。

「七月二八日 今日も陸軍病院の開墾作業であった。」「三一日 夕方前までに、大八車（荷物を運ぶ人力の二輪車）で下の方の農業会などへ行った。（中略）こちらへ来て今日ほどつらかった事はなかった。」といった慣れないくらしにまつわる記述や、学校が始まってからの戦争ごっこや放課後に山や川で遊んだ楽しい思い出の記述も見られます。

原爆投下後には、広島^{かいめつ}の壊滅が学童たちに断片的につたえられ、彼らが不安な日々を送ることを余儀なくされた様子がつづられています。この日記は、当時を伝える貴重な記録となっています。

丹下健三

丹下健三（1913～2005）は、戦後日本を代表する建築家で、日本国内だけでなく海外でも非常に高い評価を得ている人物です。戦後の復興期から高度経済成長期にかけて、多くの国家的なプロジェクトを手がけました。1930（昭和5）年に愛媛^{えひめ}から旧制広島高校（現広島大学）に進学した丹下は、その後、東京帝国大学（現東京大学）工学部建築科へと進みます。

戦後、彼が関わっていた戦災復興院（現国土交通省）の復興計画に広島が取り上げられると聞き、志願して担当を申し出ます。彼にとって広島は建築家を志すきっかけとなった場所でした。彼は広島の都市計画業務に従事し、その成果が広島平和公園のコンペで1位入選という形で表れます。

他の設計案が、公園内のみを視野に入れたものに対し、丹下は平和大通りと直行する南北線上に慰霊碑と原爆ドームを配しており、その都市的スケールが高く評価されたのです。

彼はその後も広島平和記念資料館、東京オリンピック国立屋内総合競技場（代々木体育館）をはじめ、国内外の重要な建築物を数多く手がけ「世界のタンゲ」と呼ばれるようになるのです。

勲一等瑞宝賞、文化勲章を受章、また、フランス政府からレジオンドヌール勲章を受章しています。



広島平和記念資料館